



村山加奈恵展

eternally of beauty 2013 インクジェットプリント1060×1486mm

Murayama Kanae

transmigration

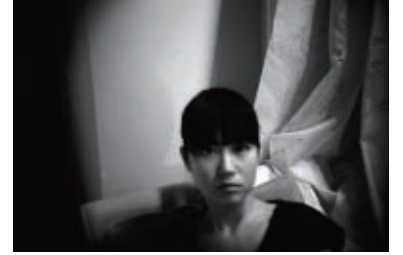
2013年11月29日(金)～12月24日(火) 水曜日休館



LIXIL GALLERY
東京都中央区京橋 3-6-18 東京建物京橋ビル LIXIL : GINZA 2F
phone 03-5250-6530
制作発行：株式会社LIXIL デザイン：SOUVENIR DESIGN INC.
<http://www1.lixil.co.jp/gallery/>



1



5



2



3



4



6

1. transmigration 2013 インクジェットプリント サイズ可変
2. ずっと、一緒 2011 フォトアクリル Φ100mm
3. 飛べるはず 2011 フォトアクリル Φ200mm
4. 天国へ行けるように 2011 フォトアクリル Φ200mm
5. Dream delights Reality 2010 インクジェットプリント 各 445×295mm
6. 春が来る頃に 2012 フォトアクリル 334×514mm 計9枚



村山 加奈恵

Murayama Kanae

1988年 東京都生まれ
2013年 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業
現在 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程在籍

〈個展〉
2010年 「村山加奈恵作品展 夢想点灯現実—Dream delights Reality—」 epSITE (中国・北京)
2008年 「世界はいつも変化して。」 epSITE (東京・新宿)

〈グループ展〉
2010年 「第61回東京藝術大学卒業・修了作品展」 東京都美術館 (東京・上野)
2010年 「BEYOND THE BODY」 Museum of Contemporary Art Shanghai (中国・上海)
2009年 「Small Selections」 ギャラリー坂巻 (東京・京橋)
2008年 「ART OSAKA 2008」 堂島ホテル (大阪)
2008年 「Self Portrait」 ギャラリー坂巻 (東京・京橋)
2007年 エブソン 「カラーイメージングコンテスト」 スパイラルホール (東京・青山)

〈受賞歴〉
2007年 エブソン 「カラーイメージングコンテスト」 準グランプリ

——村山さんの「eternally of beauty」(2013)は、黒い背景に人物や植物が浮かび上がる端正で静謐な印象がありました。写真で作品をつくり始めたきっかけはありますか

村山：小さい頃から絵を描くことが好きで、美大の油絵科に進もうと思って行った予備校の図書室で、サラムーンの写真に出会ったんです。先生の趣味思考の詰まった本棚があって、いつもそれを見ていました。サラムーンは昔VOGUEなどハイファッション雑誌でモデルとしても活躍していましたので、中学生になってファッションに興味を持つようになり、雑誌もよく見て知っていました。その影響でボラロイド作品を制作するようになりました。好きな作家の藤原新也さんがエブソンのカラーイメージコンテストの審査員をされていると聞いて、一度作品を見て頂きたくて応募して、その時に賞を頂きました。それがきっかけで写真をやりたいと思いました。

——村山さんにとって、油絵を描くことと、写真で制作することの違いはありますか

村山：私の油絵の作品は基本的にモノトーンで、抑えた色調の中でいかに世界観をつくるかがテーマでしたから、始めの頃の写真作品には、こうした傾向が繋がっていると思います。背景に黒色を使うというのも、カメラの中の密室性を意識していることでもあります。やはりデッサンで木炭を使っていた時の影響ではないかと思います。私の作品を見た方は、作家を静かで神経質なタイプだと思われるようですが、私自身は攻めて制作しているつもりなんです。

——写真の制作で留意していることはありますか

村山：私は油絵を描いていたせいか、撮影してそのまま提示するのではなく、自

分の手跡を残すことに執着があるようです。油彩画では油絵の具を何層も重ねて、やっと出来ていくものだという感覚がありますが、現在の技法でも同じようなことをしています。

写真で制作を始めたとき、記憶などの目に見えないものを表現したいと思っていました。伝えたくても言葉で伝えられないものを他人に見せるために写真というツールがあると思います。「Dream delights Reality」(2010)や「White light / White room」(2011)はその頃の作品です。時代は変化していくので自分も変化していきたいし、新しいメディアができればそれも試してみたい。スタイルに当て嵌めるのではなく、表現したいことに対して柔軟に動きたいと思います。

——作品のテーマは村山さんの記憶や想いなど様々なのでしょうか、「春が来る頃に」(2012)はどのような想いでつくられたのですか

村山：作品に対して自分の中に思い描いているものはありますが、基本的に作品のとらえ方は見る方に委ねています。この作品は、別撮りの写真をいくつか重ねることで、ひとつの世界をつくっています。自分が思い描いていることを、何かかたちに出来ることは作家である特典であり、時には作品にすることで消化できることもあります。例えば、自分のやるせないどうしようもない気持ちや欲求だとか、セラピーみたいなことでしょうか。見ているあなただって同じではないかと。そこを隠しても仕方がないと開き直っています。

——「eternally of beauty」(2013)で花、ネイルアート、スパンコールなど少女的なモチーフを選んだのはなぜですか

村山：作品制作でセルフポートレートを撮っていると、やはり理想としている自分と異なる現実が出てきます。一日が終わって化粧を落として、それまで自分を形成していたものが剥がれていくときに、なんとなく感傷的な気持ちになることは女性なら誰でも経験しているのではないのでしょうか。これはなんだろうと思ったことから制作しました。

それから、作品のモデルが作家自身であるということは、見る方も作家のことが気になると思うんです。自分がどう見られるかを意識し、作品と自分を切り離すのではなく、自分の存在もひとつの作品として振る舞いたいとも考えています。

それはアイドルを見て育っていることや、先輩アーティストの幅広い活動から意識するところでもあり、シンディー・シャーマンに同じ女性として共感していることもあります。

私は素の時が逆に苦しかったりします。怒ることも笑うことも自由な状態というのが一番困る。自分とは違うあるひとつのキャラクターになってしまう方が楽なんです。化粧やコスチュームで虚構の世界をつくり上げることは、世界中に古代から、祝祭的に化粧を施す習慣があることからも重要な要素なのだと思います。

——今展はどのような作品になりますか

村山：「eternally of beauty」(2013)に続く新作で、自分自身に密着しているもの、身近なものをモチーフにします。前はネイルアートを使いましたが、今回は自分の毎日の化粧をプリントして、それを撮影したものから、制作を考えています。

インタビュー：大橋恵美 (LIXILギャラリー)
2013年10月1日